令和７年度　研究全体構想

１　研究主題について

研　究　主　題

つながりの中で学ぶ、しなやかな子ども

－深い子ども理解を土台にした「教師の待ちと出」を探る－（５年次）

学校研究は、学校教育目標「よりよい社会や人生をともに切り拓いていく子どもを育てる」を具現化するための方策である。本研究主題は、学校教育目標と子どもの実際の姿と期待する姿を照らして設定した。また、それに迫るための教師のあり方を副題に据え、研究の柱とした。多様性を尊重し、他者と協働的に学びながら、それぞれの強みや個性を発揮できる子どもを育てていきたい。

２　研究の重点　　「はじめに子どもありき」を出発点にして

（１）　深い子ども理解

①　深い子ども理解の土台＝愛情と信頼に基づく関係

深い子ども理解とは、子どもの育ちの可能性を探ることである。深い子ども理解は、愛情と信頼に基づく関係の上に成り立つものである。

子どもたちは、一人一人違っている。そして、本来力をもち自ら進んでいく力をもっている。どの子もその子らしく学び、その子らしく育ってほしい。そのために、教師は子どものありのままを受け入れ、心に寄り添い、一人一人を大切にする。子どもの願いや思いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかをとらえることが必要である。また、子どもの行動そのものにだけ目をやらず、行動の奥にあるもの・意味するものまで見とれる教師でありたい。そうして、その子の「人・もの・こと」に対する意味や価値を分かろうとし続けることに取り組んでいきたい。

②　カリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントは、学級担任の日常の営みである。何より、目の前の子どもを丁寧に見つめ、その意味を授業や学級経営の改善に返していくことである。本校の子どもたちは、どんな子どもたちなのか、子どもの姿を分析する必要がある。子どもの事実をとらえ、資質・能力で分析することができるようにしたい。そして、学校全体で育てたい子ども像を共有し計画を立て、「子どもがどう育ったか」という視点でふり返り、目の前にいる子どもの指導にいかしていくことを続けていく。子どもが身に付けた資質・能力は意図的にフィードバックして、子どもが自身の成長を実感し学び続けることができるようにしたい。昨年度、それぞれの学級が「学級カリキュラム」を作成し、実践を積み重ねてきた。昨年度の学級カリキュラムを生かしながら、目指す子どもの姿に迫るために、それぞれの特色が見える学級カリキュラムを構築していく。その際、生活科・総合的な学習の時間を要に、他教科や領域、行事等と関連付けながら学級で目指す子どもの姿に迫るようにする。一人一人の思いを尊重し、子どもに学びを委ねる単元・活動を大切にしていく。

また、作成した単元配列表に、単元を入れ替えたり他教科と関連付けたりした足跡を残し、次年度に引継いでいく。内容の重点化、焦点化を図り、学びの充実や軽重のつけた実践につなげていきたい。

（２） 教師の「待ちと出」

① 教師の「待ち」

子どもが強い思いをもち、主体的に活動に向かったとしても、必ずしもことが順調に進むわけではない。見通しの甘さから、やり直しを余儀なくされることもある。そんなとき、どんな思いでそれらを乗り越えようとしているのか、実際にどのようにして乗り越えているのか、そしてそれを支える思いは何かを捉えながら、子どもを信じて見守っていく。

ただし、子どもたちがやりたいことをただ手放しで見ているわけではない。子ども主体ということは、「子どもたちの自主性に任せる」のではない。子どもが行動を起こす元になる心を支援し、「子どもの自主性を育てる」ことである。子どもが、知識や技や見通しがないままに、ひたすらに迷い、悩んでいることはないか。教師は策もないまま子どもを傍観していることはないか。子どもの育ちにつながる「待つこと」になっているか。そもそも子どもを信じて「待つこと」ができているか。教師は常に自分をふり返りながら、検討していく。

② 教師の「出」

「待つこと」だけでは子どもの育ちは成立しない。子どもが学んでいく過程を妨げてはいけないが、学び方が分からないときに必要なことを教えないと、子どもの学びは広がらない。子どもたちの力が最大限に引き出され新しい自分に出会うためには、「教師の出」つまり、より広い視野と深い思索に根差した適切な教師の支援が大事になる。そのために、わたしたちは物事の本質を捉え、子ども理解を土台にした教材研究、内容研究を大切していく。「教師の出」は、子どもが活動をうまくできるようにするためだけのものではない。子どもの追究を強くするために行うものである。子どもたちが身の回りの人・もの・ことに問題意識をもち、解決していくことができるようにするために、どんな場合に待ち、どこでどれぐらいどのように出るかを吟味していく。

３ 研究の内容と方法

（１）夢中になって学びに向かう、自立した学習者を育てる教師の待ちと出

昨年度、全職員で一つの単元内自由進度学習に取り組んだ。普段、長い時間集中して授業に参加することが難しい子が、単元の学びに没頭し、目を輝かせながら問題に取り組んでいた。また、いつも授業を牽引する子は、自分で決めた課題を自ら選択し、終わらせ、取り組みたい発展課題に試行錯誤しながら取り組んでいた。夢中になって学びに向かう子どもたちの姿を見たわたしたちは、「普段の授業の中にもこのような子どもたちの姿を求めたい。」と、共通の思いを抱いた。また、子どもたちの多様性を尊重し、個に応じた授業を展開していく必要性を痛感した。

目の前の子どもたちは一人一人違う。だからこそ、一人一人の育ちを適切に捉え、目指す子どもの姿を設定する必要がある。そのため、自立した学習者を育てるためには、深い子ども理解に根差した個に応じた教師の待ちと出が求められる。「こんな場をつくったらあの子は輝きそうだな。」「これがあればあの子も一人で学べそうだ。」「ここでつまずいた場合は、〇〇の視点から助言してみよう。」と思いを巡らせるなど、個の求めに合った働きかけを吟味することで、個の学びを大切にする。一人一人が築いた学びを集団の中で紡ぐことで、個の学びがさらに磨かれ、学ぶよさを実感できるようにしていく。そうすることで、「もっと～してみたい。」という思いを膨らませ、夢中になって学びに向かい続けると考える。

（２）子どもも教師もわくわくす・ドキドキする楽しい授業

学校生活の大半を過ごすのは授業の時間である。子どもたちが「授業が楽しみだな。」「どうしてこうなるのだろう？調べてみたいな。」「もっと～したい。」と思いを膨らませることができるような日々を目指していきたい。そのためには、子どもの思いに耳を傾けたり、想像したりしながら、その子のことを理解しようとする姿勢が欠かせない。その上で、それぞれの思いにフィットする働きかけ（単元づくり・教具

や教材づくり・言葉がけ・環境づくり等）ができるように、その教科や単元の本質を捉えた働きかけを講じていく。また、子どもの思いと併せて、わたしたち教師自身が「面白い。」「もっと～したい。」と思えるような材や単元を構想することを大切にしたい。子どもだけでなく、教師の中にも「楽しい授業がしたい。」「もっとできるようになりたい。」という強い願いがある。それぞれの授業者が実践を通して「できるようになりたいこと」や、「目指す授業像と教師の姿」を明らかにし、実践に取り組んでいく。教師がわくわく、ドキドキする授業を構想したり実践したりすることで、子どもたちも学ぶ楽しさや喜びを味わうことができるようにしたい。

（３）本物の事象（人・もの・こと）との出会いを大切にする

子どもの追究意欲は、常に高まった状態にあるわけではない。活動の空気が停滞し、這いまわることもたびたびある。そのようなとき、わたしたちは本物の事象（人・もの・こと）といつ・どのように出会わせるか、吟味することが求められる。

昨年度、５年総合的な学習の時間「米粉広め隊」の実践では、米粉パンを製造・販売する阿部さんに、なぜ今の職に就いたのか、どのような願いをもっているのか、お話いただいた。「米を食べて健康に生きて欲しい。」「苦しいことばかりだけど、お客さんの声があるから頑張れる。」「米の高騰で利益はほとんどない。ただ米粉パンを作ることが面白い。」など、熱い思いに触れた子どもたちの目は輝いていた。そこから「ぼくたちもこんなことをやってみたい。」「なぜこうなっているのだろう。」と、一人一人の思いが膨らみ、熱を帯びた追究に向かっていった。

このように、いつ、どのような本物の事象に出会わせるべきか、子どもの姿をもとに吟味していきたい。また、日頃から視野を広げ、子どもの学びを広げたり深めたりできる事象がないか検討するなど、教材研究に努めていく。

（４）すべてが「授業」ととらえ、「生徒指導の５つの場」を意識して指導にあたる

子どもたちにとって、学校生活の全てが学びの場である。各教科領域の授業はもちろん、朝の会や帰りの会、給食や掃除の時間も「授業」としてとらえていく。本校で「三大行事」として位置づけている学校行事「いちょう大運動会」「いちょう音楽会」「いちょう兄弟体験学習」も同様である。すべての「授業」について、「目の前の子どもにとって価値ある学びになっているか」という視点をもち、教師の待ちや出を探りながら子ども一人一人の課題や育ちをとらえていくようにする。

生徒指導の５つの場……「自己決定の場」「存在感が持てる場」「人間的にふれあいが大切にされる場」「相手との関わりで行動できる場」「発達の可能性を最大限に発揮しうるような場」

（５）「小さな学習会」

毎週金曜日の放課後に「小さな学習会」を位置づけて研修の時間とする。教材研究や情報交換、行事の詳細の打ち合わせ・検討、地域施設の見学などを行う。紙上での研修や共通の課題に取り組むなど、様々な方法を用いて日常的に研修を積み、実践にいかすことができるようにする。

（６）校内授業研究会

校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実、改善を図り、目の前の子どもを育てていく。

各教科の授業づくりにおいては、教科内容そのものを研究し、教科を通した目で目の前の子どもの育ちを考えることが必要である。子どもたちは、どんな見方・考え方を働かせるのか、身に付けるべき資質・能力は何か、どのような問題解決が成し遂げられるかを吟味していく。そして、子ども自身が自分の力を自覚し、新たな課題に挑む強さと自信を身に付けることができるようにしたい。

そのために、事前・事後研究会は全員参加とし、互いの子どもの見方を聞き合うことでより子どもを多面的にとらえ、子どもの育ちを考えていくことができるようにする。とくに、今年度は「個の学びと集団

の学び」について重点的に議論していく。また、教科内容の研究については、昨年度に引き続き外部講師の先生にご指導・ご助言いただきながら、教科内容の研究を進める。

（７）研究を発信する場を意図的・計画的に運営する

わたしたちの取り組みを多くの方々に見ていただいたり協議したりできる場を年２回設定する。私たちが大切にしてきたことを発信することで、手ごたえや新たな視点に出合うことができると考える。そのために、年２回予定されている研究会の場を意図的・計画的に運営し、子どもの育ちはもちろん、わたしたち教職員がさらにレベルアップできる場にしていく。また、学校外の方々を招き、教材研究や単元づくり、事後研において、様々な視点からの意見をいただくことで、本校での取り組みを広い視野でふり返る機会とする。（予定：①6 月 28 日 日本生活科・総合学習教育学会山形大会
②12 月 3 日 自主公開研究会）

（８）研究のまとめ

１年間の実践をふり返るとともに子どもの育ちをまとめ、研究の足跡を残す。（『銀杏の実』第７１号）

４　年間計画

４月～５月　・研究主題と研究の柱、具体的な取り組みの共有
・学級カリキュラム（年度当初版）作成
・校内授業研究会（原則一学級一授業）を実施し、授業力の向上を図る

６月～　・三大行事（「いちょう大運動会」、「いちょう音楽会」、「いちょう兄弟体験学習」）について「教師の待ちと出」を視点とした検討・ふり返り
・日本生活科・総合学習教育学会山形大会（生活科・総合的な学習の時間の授業公開）
・学級カリキュラム修正

１２月　・自主公開研究会

２月　・研究のまとめ（１年間の授業や子どもの育ち）
・学級カリキュラムふり返り

３月　・研究集録発行

※年間を通して毎週金曜日（場合によっては水曜日も含む）の放課後に「小さな学習会」を設定する。